



チュートリアル課題 私の心の中のリボン

著者名	東京女子医科大学
雑誌名	チュートリアル課題
巻	2011
号	B5
発行年	2011-04-01
URL	http://hdl.handle.net/10470/31193

2011年度 Block. 5

課 題 No.3

課題名：私の心の中のリボン

課題作成者：感染症科

平井由児

シート1

大手広告代理店に勤めるエリさんは25歳の女性。
ファッション誌の広告を主に担当しています。

半年前には4年間交際していた彼と別れ、落ち込んだこともありましたが、
現在は念願の部署に配属となり、充実した日々を送っていました。

約1ヵ月くらい前から咳が出るようになってきました。
2週間前からはそれがさらに悪化しました。
近所にある子供の頃からのかかりつけの医院で咳止めなどを処方されましたが、一向に改善しません。
長く続く咳を心配した医院の先生は、こう言ってエリさんに大学病院の受診を薦めました。

医院の先生：「咳が長く続く患者さんを診察すると、先生はいろんなことを考えて心配になるんだよ。一番近い大学病院を紹介するね。」

エリさん：「いろいろといいますと・・・??」

先生は言いました・・・

シート2

エリさんは大学病院の呼吸器内科を受診し、問診や診察を受けました。
担当の先生はその日に撮影した胸部エックス線検査をみながら、こう言いました。

呼吸器内科の先生：「この胸部エックス線写真の所見では左肺を中心に何らかの陰影があります。本日、胸部CTスキャンを行い、気管支鏡検査の予約をしたいと思います。採血の結果は次回報告しますね。」

咳が1ヶ月以上も続いていると、仕事場の同僚にも心配されるのはもちろんのこと、仕事先のクライアントにもいい顔はされません。
仕事でも相手に嫌なイメージを持たれたくなかったエリさんは、思い切って検査を受けることにしました。

呼吸器内科の先生：「こちらの病院では気管支鏡検査を行なうにあたって肝炎ウイルスや梅毒、HIV抗体を調べることになっています。検査の同意書に加えて、こちらの書類にも御署名を頂けますか？」

エリさんは「HIV」と聞いて少し驚きました。

そういえば、大学の同級生のSちゃんが妊娠したときには、産婦人科でHIVを調べたといっていました。
また、ヴォーカリストをエイズで失ったとあるバンドの曲「ボヘミアン・ラブソティ」を以前に交際していた彼がよく聴いていたことも思い出しました。

シート3

数日後、採血と胸部CTスキャンの結果を聞くためにエリさんは再び大学病院を受診しました。
胸部CTスキャンでは胸部エックス線写真と同様に「間質性肺炎」があるとの説明を受けました。
気管支鏡検査は来週行なう予定になっています。

呼吸器内科の先生は、汗ばみながらこう言いました。
呼吸器内科医：「それと・・・エリさんのHIV抗体検査が陽性なんです。HIV抗体の確認検査（ウエスタン・ブロット法：WB）も陽性でした。」

そう言うと、感染症科の医師と専任看護師を紹介されました。

エリさんは口の中がカラカラで、頭も真っ白になりました。
その後の先生の説明はほとんど耳に入ってきません。
汗が耳の後ろを流れていきました。

話を遮るようにエリさんは聞きました。

エリさん：「先生、私ってAIDSなんですか？ それってどんな病気なんですか？ 私って死ぬんですか？」

シート4

エリさんの診断はHIV感染によるニューモシスチス肺炎（ニューモシスチス・ジロヴェチー）肺炎でした。

画像検査所見で間質性肺炎の所見があり、
気管支鏡で採取した喀痰のグロコット染色は陽性、ニューモシスチスDNA-PCR検査は陽性、 β dグルカン
551IU/L（正常値：20IU/L未満）と上昇していました。
このとき、エリさんのCD4リンパ球数 $160/\mu\text{L}$ （正常値：700-1300/ μL ）， HIV-RNAウイルスPCR
46000copy/ μL （正常値：検出せず）でした。

エリさんは入院し、スルファメトキサゾール・トリメトプリム合剤（ST合剤）の内服を開始しました。治療期間は3週間でした。

この間に頭部MRIなどの画像検査や眼底検査、消化管内視鏡を行ない、幸いなことに異常を認めませんでした。
婦人科も受診し、現在は経過観察中です。

肺炎も完治に近づき、気持ちも落ち着いてきたある日、エリさんはHIVを担当する看護師さんに質問してみました。

エリさん：「私はなぜHIVに感染したのですか？」

看護師：「出産のときに感染する母子感染や針を使うドラッグが原因のこともあるけれど、ほとんどはセックスなの。」

「セックスのとき、相手の男性は必ずコンドームをつけていた？」

エリさんがいままで交際したことがある男性は2人でした。
もちろん、ドラッグには興味も経験ありません。

でも相手の男性が、必ずコンドームをつけていたかというと・・・・・・。

シート5

エリさんには身体障害者手帳（免疫機能障害）が交付され、医療費の経済的負担はほとんどなくなりました。

退院してから1ヶ月ほど経過したところで、抗HIVウイルス療法（HAART）が開始されました。

エリさんは1日に1回、必ず決められた時間に合計2錠の抗HIVウイルス薬を内服します。

治療を一生涯続けることには不安を感じることもありますが、
エリさんにとって毎晩23時に抗HIVウイルス薬を内服することは生活の一部になりました。

エリさんは仕事にも復帰し、今までと同じようにフルタイムで働いています。

スポーツジム通いも再開し、以前と同じメニューをこなしています。
来年の1月には大学時代の友人とスノーボードに、4月にはバリ島に行く予定です。

病気のことは、まだ誰にも話していません。
心の中にしまったままです。

両親にも伝えようと思っていますが、なかなか決心ができません。
それは友人に対してもです。

退院から9ヶ月ほど経過した12月1日、この日は感染症科の外来受診日でした。

エリさんのCD4リンパ球数 463/ μ L（正常値 700-1000/ μ L）、HIV-RNAウイルスPCR 50copy/mL未満（正常値
検出せず）と抗HIVウイルス療法（HAART）は十分な効果を認めています。
エリさんはこれまでに一度も内服を忘れたことはありません。

この日、12月1日は世界エイズデー。

昨年までは気にも留めなかった赤いリボンのマークですが、今のエリさんにとって大きな意味を持つものになりました。

「国も、人種も、年齢も、性別も、セクシャリティも異なった人々が、この赤いリボンで繋がっているんだ。」
エリさんはそう感じました。